

[30]

氏名	岑 <sup>じん</sup> 玲 <sup>れい</sup>
博士の専攻分野の名称	博士(文化交渉学)
学位記番号	東アジア文化博第2号
学位授与の日付	平成26年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	清代中国漂着琉球民間船の研究
論文審査委員	主査教授 松浦 章 副査教授 内田 慶市 副査教授 奥村 佳代子

## 論文内容の要旨

岑玲氏の提出した博士論文「清代中国漂着琉球民間船の研究」は次のように構成されている。

- 序章 琉球王朝研究と清代檔案の重要性
  - 第一部 清代中国に漂着した琉球民間船
    - 第一章 清朝中国に漂着した琉球船の漂着地
    - 第二章 清朝中国に漂着した琉球船の漂着時期と航行地
    - 第三章 清朝中国に漂着した琉球民間船の乗員について
    - 第四章 清朝中国に漂着した琉球船の救済方法
    - 第五章 清朝中国に漂着した琉球船乗員の言語接触
    - 第六章 清朝中国に漂着した琉球船乗員の帰国方法
  - 第二部 琉球民間船の積荷から見る琉球国内の物流
    - 第一章 琉球国内の米穀の物流
    - 第二章 琉球国内の砂糖の物流
    - 第三章 琉球国内の塩の物流
    - 第四章 琉球国内の綿布の物流
    - 第五章 琉球国内の芭蕉布の物流
  - 終章 清代檔案から見る琉球民間船の航運状況
  - 補論 清代中国琉球交渉史の諸相
    - 第一章 『遐邇貫珍』に見る清朝と琉球の交渉
    - 第二章 清代澳門と広東省に漂着した琉球船の海難救助
- 初出一覧

東アジア海域に位置する琉球国は、多くの島嶼部を要し、古くから船舶を琉球国内の島嶼部との通交に利用してきた。しかし海難事故も決して少なくは無く、中国沿海の山東、江蘇、浙江、福建、広東、台湾等省などに漂着した。このような琉球船の中国への漂着関

係の記録は、中国第一歴史檔案館が所蔵する中琉関係の清代檔案や琉球側の『歴代宝案』の中に見られる。とくに清朝は朝貢国である琉球国の難民を丁寧な撫育して送還したために多くの琉球船の漂着や送還に関する檔案が残されている。

そこで岑玲氏は、当時の琉球国内の状況を把握するために中国側の檔案史料を利用して本博士論文を作成した。

これまで琉球王朝時代の史料の不足を補うために、とくに清朝檔案を利用した朝貢関係の研究など多くが見られたのに対して、岑玲氏が着目したのが琉球民間船の中国漂着に関する清朝檔案を利用することである。それらを精査すると17世紀から19世紀末までの琉球諸島間の航運、交通に関与した民間の琉球船の中国漂着事例が多々見られ、琉球民間船の中国への漂着と同地での救済の実情や帆船航運や琉球産品の商品流通の問題を解明できるとして清代檔案を利用して究明したものである。

第一部「清代中国に漂着した琉球民間船」においては、清代の中国へ漂着した琉球の民間船が、どこに漂着し、中国でどのように救済されたか、特に言語が通じない際の言語接触や、救済後の琉球国への送還方法などを詳細に分析し、全六章にわたって述べている。

第二部「琉球民間船の積荷から見る琉球国内の物流」では全五章にわたり、中国へ漂着した琉球民間船を調査した清朝檔案に依拠して、琉球船の様々な航運形態による琉球国内の物流について考察した。琉球国の漂着船が積載していた荷物を詳細に検討すると貨物の種類に特徴が見られ、最も数量が多かったのは、琉球諸島から那覇の王府に進貢された米穀、砂糖、塩、綿布、芭蕉布などであり、それらの物流について究明している。

結論「清代檔案から見る琉球民間船の航運状況」は、以上の論述をふまえて結論を述べる。

以上が本論文内容の要旨である。

## 論文審査結果の要旨

岑玲氏が指摘したように、琉球王国時代における琉球史料は多くない。とくに社会経済に関する史料は不足しているため、琉球国と朝貢関係にあった中国史料、とくに大量に残された清代檔案の活用が有効である。これら清朝の檔案史料の分析によって、岑玲氏が指摘したように当時の琉球国内における商品の種類や生産地や出帆地や目的地などの流通状況が看取することが可能となった。琉球王国時代の社会経済事情の一端が、清代中国の檔案史料の分析によって具体的に明らかにしたのが本論文と言える。

これまで琉球王朝時代の史料の不足を補う方法で、とくに清朝檔案を利用した朝貢関係の研究など多くが見られたのに対して、岑玲氏が着目したのが琉球民間船の中国漂着に関する清朝檔案である。すでに乾隆時代の清代檔案を利用した田名真之氏の「琉球船的漂流・漂着- 以乾隆期的事件為例-」がある。しかし同論文は、漂着の事実を解明したが、詳細な検討は不十分であった。その他に琉球の民間船の漂流問題を検討した研究は見られない中で、岑玲氏が琉球諸島間の航運に従事し、琉球諸島の交通に使用された民間の琉球船の中国漂着事例を検討したものである。

岑玲氏によれば、中国へ漂着した琉球国の民間船は、200余年間に280隻の航運事例を

確認できる。その琉球民間船の多くは、琉球諸島とほぼ同緯度に位置する浙江省沿海部に最も多く漂着し、北は寧波府、台州府、温州府の順に多く、それに次ぐのが福建省であった。これら漂着船は多くの場合、当地の官吏等との間で筆墨を用いた筆談による言語接触が行われ、当地の官吏から食料や衣料や船舶の修繕などの救済を受け、那覇からの進貢船等が入港する福州に送られ帰国したことを詳細に検討した。

清代中国へ漂着した琉球の民間船の漂着時期から、その航海の時期は主に旧暦の夏六月、秋七月の夏から秋に集中し、台風が多発する時期で船が遭難する割合が高い時期でもあったが、同時に米穀収穫の最盛期の六月下旬であり、収穫した新鮮な米穀を王府に貢納しなければならなかったため海難事故が多発したことを明らかにしている。

漂着船が航行した目的は琉球諸島から那覇にある王府への進貢・貢納のための航運に従事し、極めて少数ではあるが、那覇や泊村以外の港との貿易や、近海での漁業などに従事した船があったことを明らかにした。上述したように琉球王朝時代の社会経済史料が決定的に不足している状況から、清代檔案に見られる中国に漂着した琉球民間船に焦点化し検討すると、琉球船の琉球諸島内の海上輸送の形態は、米穀輸送を例とするならば琉球王朝時代の主要な米産地であった八重山列島の石垣島、宮古列島の宮古島を包含する先島諸島から琉球王府がある那覇港への米穀貢納が常時行われており、その他においても様々な物資を積載して琉球諸島間において小型船舶ではあったが盛んな航運活動が展開されていた実態が明かとなったと言える。清代檔案の琉球王朝研究の有効性を論じた。

この他に、那覇から福州への朝貢船の漂着問題などとの比較研究など残された課題はあるが、岑玲氏は既に博士前期・後期課程に在学中 5 年間に学会誌を含め論文 6 本、国際学会での研究発表を 5 回行うなど、学会での一定の評価を得ており、自立した研究者として認めることが出来るであろう。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。